

人倫訓蒙圖彙

四

15
396



始



飛
集

人倫訓蒙彙

四

商人部 水不日

呉服や

無針と名目

時角のり呉服を織

り糸束れ女こりて絹

と織れつてはたまた

てと名のるめと呉服と

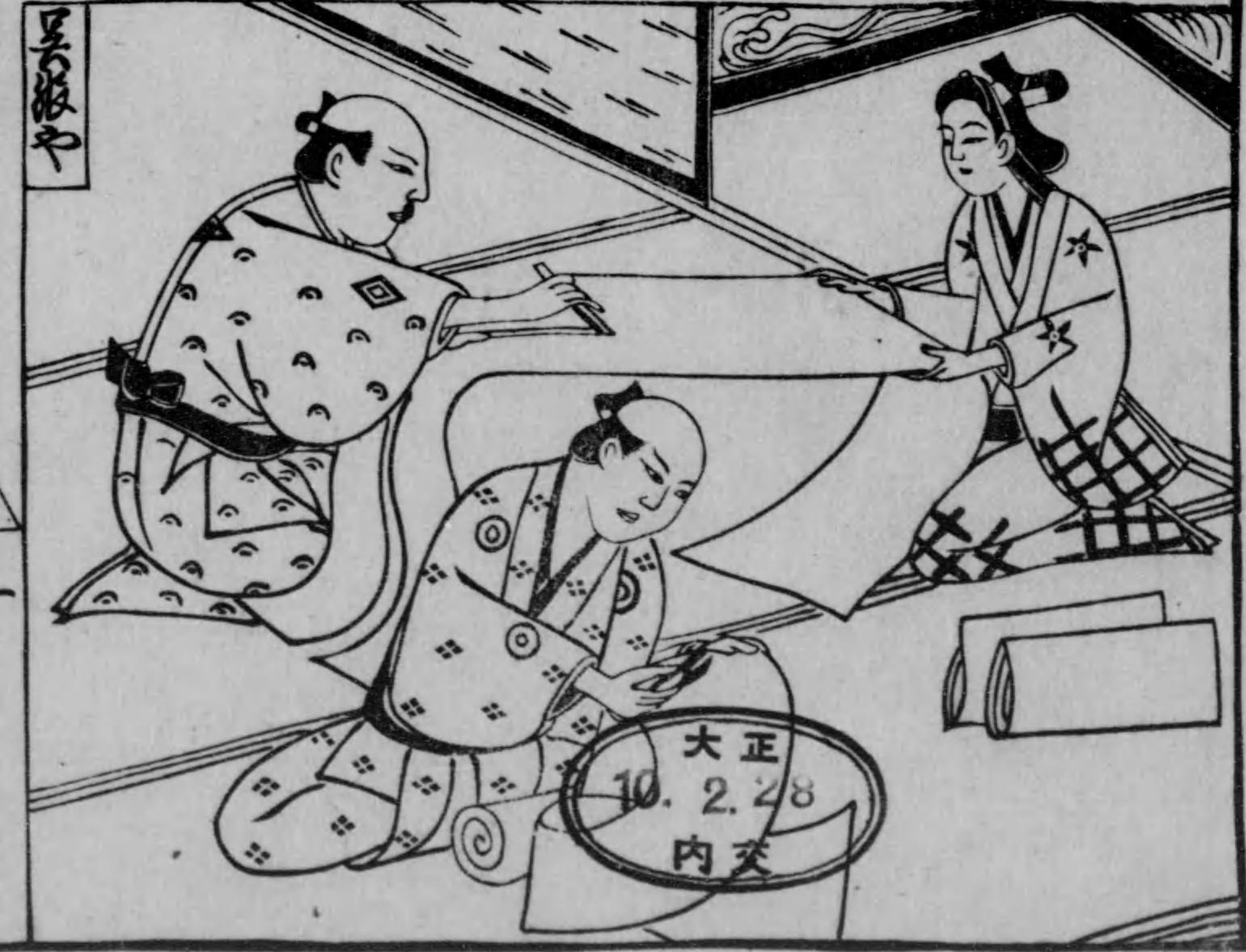
り気呉服や中立賣西

階後春縫物に産る

橋南の角小川也出上

丁業や田舎に江を推

町上米老所たるあはす



呉服や

これと高ん世とるや
 と栞でめん世とる金
 相と栞で一糸のあ城川
 何系下押お修教下
 あもあり
持松綱
 意子のめりてあまひお一
 切けあもあり修方の神
 五人ゆひくのあまひと
 くらりてけお持松
 糸但紙為板あまひて
 造る栞おのあまひ糸



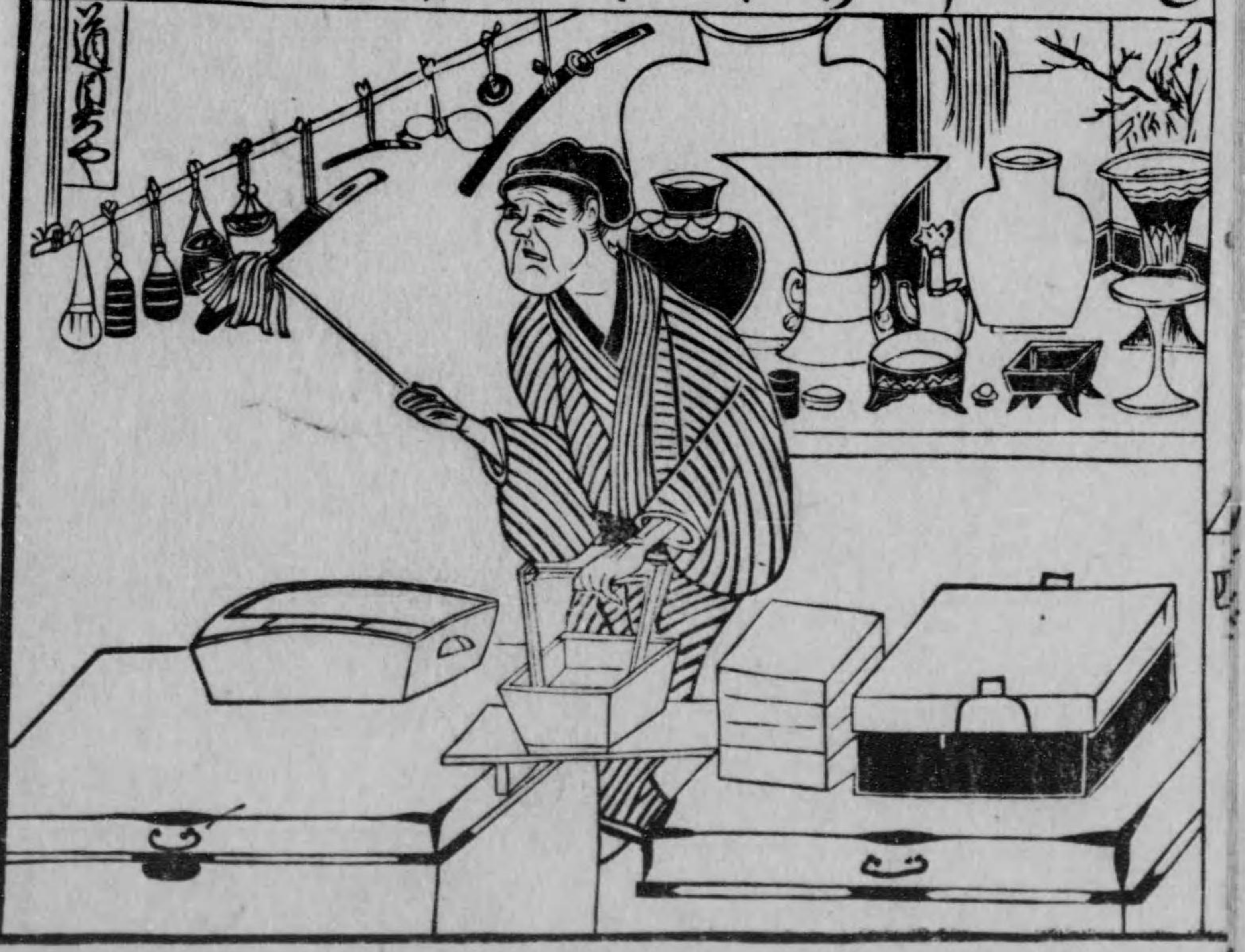
古子や

栞乃あけ栞あり
酒 或著に云酒の文
 の唐江安利まんあ
 てらととくらあまひ年
 茶酒かりがゆんお二水お
 面とあへ又玄堯の代よ
 終つとめくじ母の修
 とられてあへんかるとま
 子とまるとまのりて栞の三
 本お所くとまかるとまあ
 れまるとまはてしとま

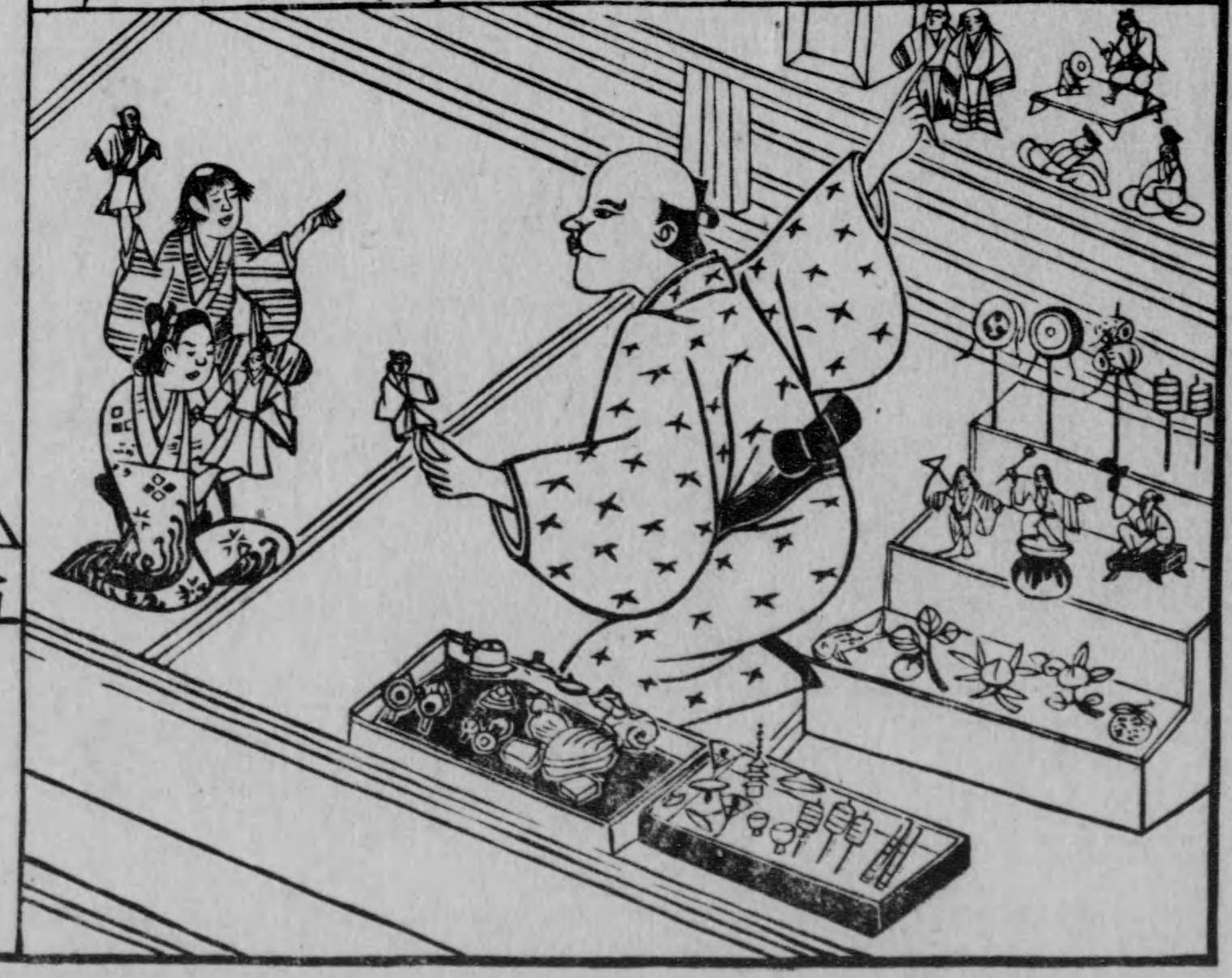


切や

よもい味とあつとるはる
 菱島玉の牡丹とさきと
 けつろ馬王とさきと
 て痛火妻代は味とさき
 けつろとさきとさきと
 人の一と神のさきと
 や京大坂とさきと
 池木名酒とさきと
 若る男と杜氏とさきと
 つみかきり



遠く大坂とさきと
 遠く法圓とさきと
 酔和泉とさきと
 わさきとさきと
 のさきとさきと
 いもさきとさきと
 笑いとさきと
 老子のさきと
 砂とさきと
 子のさきと
 よんでさきと



あり強棒にちの三條
 を後ろそ二つとも研
 候ともしふ **飛師** 味香
 や櫻江や赤も水万代
 もことりらも船舟の板
 ありとわなもらと合
 室よ入てらもとる
 ち合味味はもらあゆ
 うらぶくもらわらふ
 かり **味香** 味香
 かり

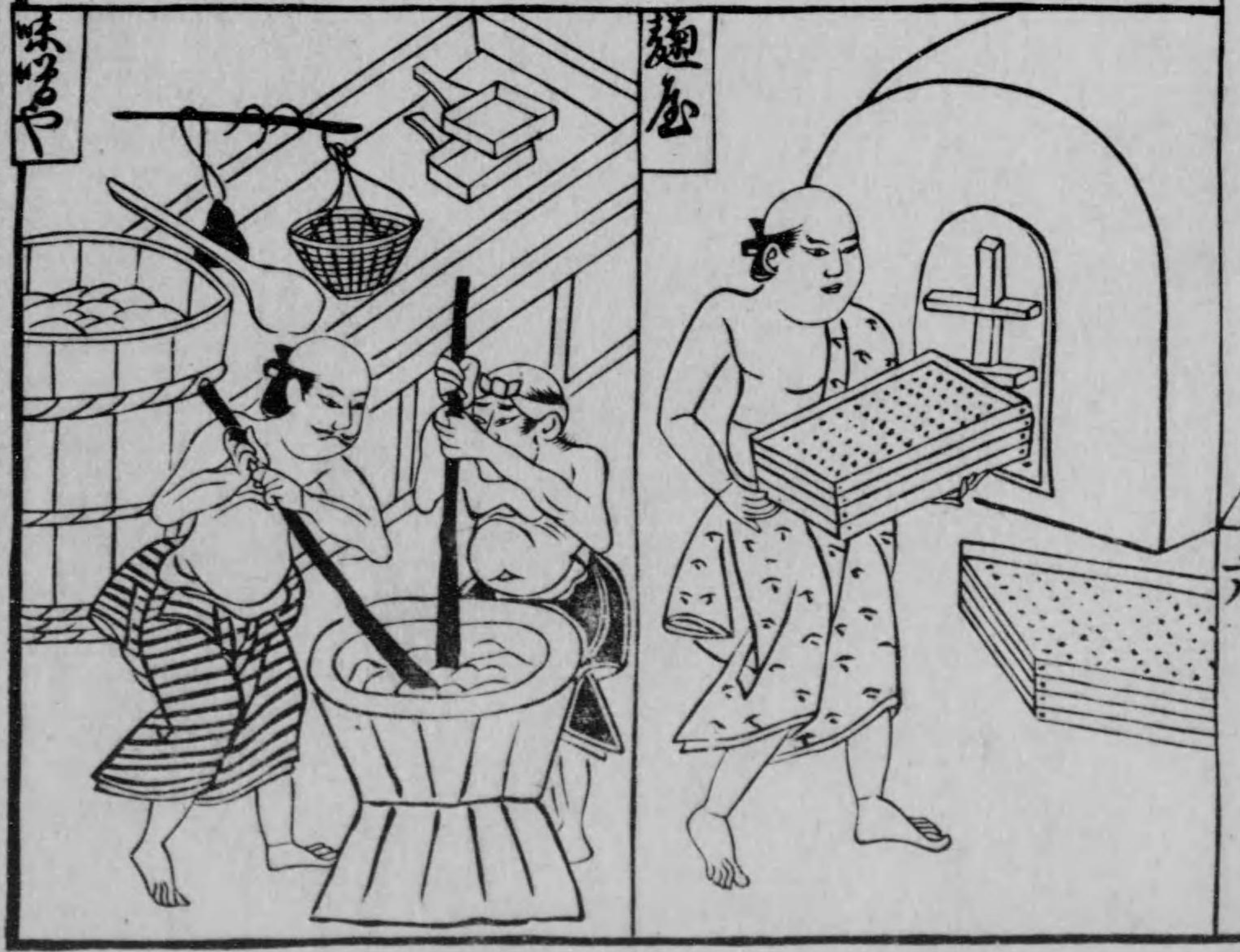


馬鹿搔と出の個味和ら
 能あつて人身の保赤の
 みるまつるも離べうら
 ものへ **紙屋** 徳園
 つい出と名物ありあり
 弘世母よいのまご紙あ
 しへま羅羅ふよまあひ
 しへま度去めてハ作
 と刺て字とほりつな
 しとちあり記私とふ
 ちへまへにけりり



八番

とうや 日おひてとよま
 まつらゆんまねとて
 本札とらひしとや
 小石物や 一切れ敷け
 了りありの部部はわわ
 室室の高人なり系
 京極屋 八坂坊
 板屋 上吉よの銅とも
 川て板とほろろ度
 本銅板ととや中池
 本ともつて極字と



それもの川ととて
 今に極よらとと
 紙の厚さのりわら
 ちの板紙す紙
 楮紙よととてか
 一切の板黄葉小
 鉄眼法師の進
 身外倫新の中
 身外ととて河
 りの板紙と
 ならけと教
 ぬあんと



銚子磨大仏を色取くし
 刀指拵揃てらばと書
 西の寺町二条の南池邊
 二条園を外取くしあり
 女給や 金と後のお場
 いろり利便と考あまの
 分りよつて後をいふ
 ありて家かきり商人かせ
 まれぬがことば多しけ



高の園果やいふ海に
 銅屋 銅屋 銅屋
 とも下よ高一切の金物
 れと早あなり綿糸との
 新とわり 綿や 綿
 とも又の梅川よりい
 とも又の梅川よりい
 とも又の梅川よりい
 とも又の梅川よりい
 とも又の梅川よりい



めやうりふくあてめあり

貨物や 旅あむ包の一名

葛藤縄綱引金掛の

袋付あてふくろり高合の

の向金ふくろりてはいつて

外う木履袋本履

唯金 万の撥柄とほとて

これとあてふくろり高合の

あてふくろり物と 綱金 絹布

やまもて高又の撥柄と高

西ふか三束あてふくろり柄おと

先とて金圓一らあて

物に 新金 新の金圓

より大津大板おとくと

分あてて金圓一つけの

とてあてて金圓一つけの

切の金穀ふくろりあて

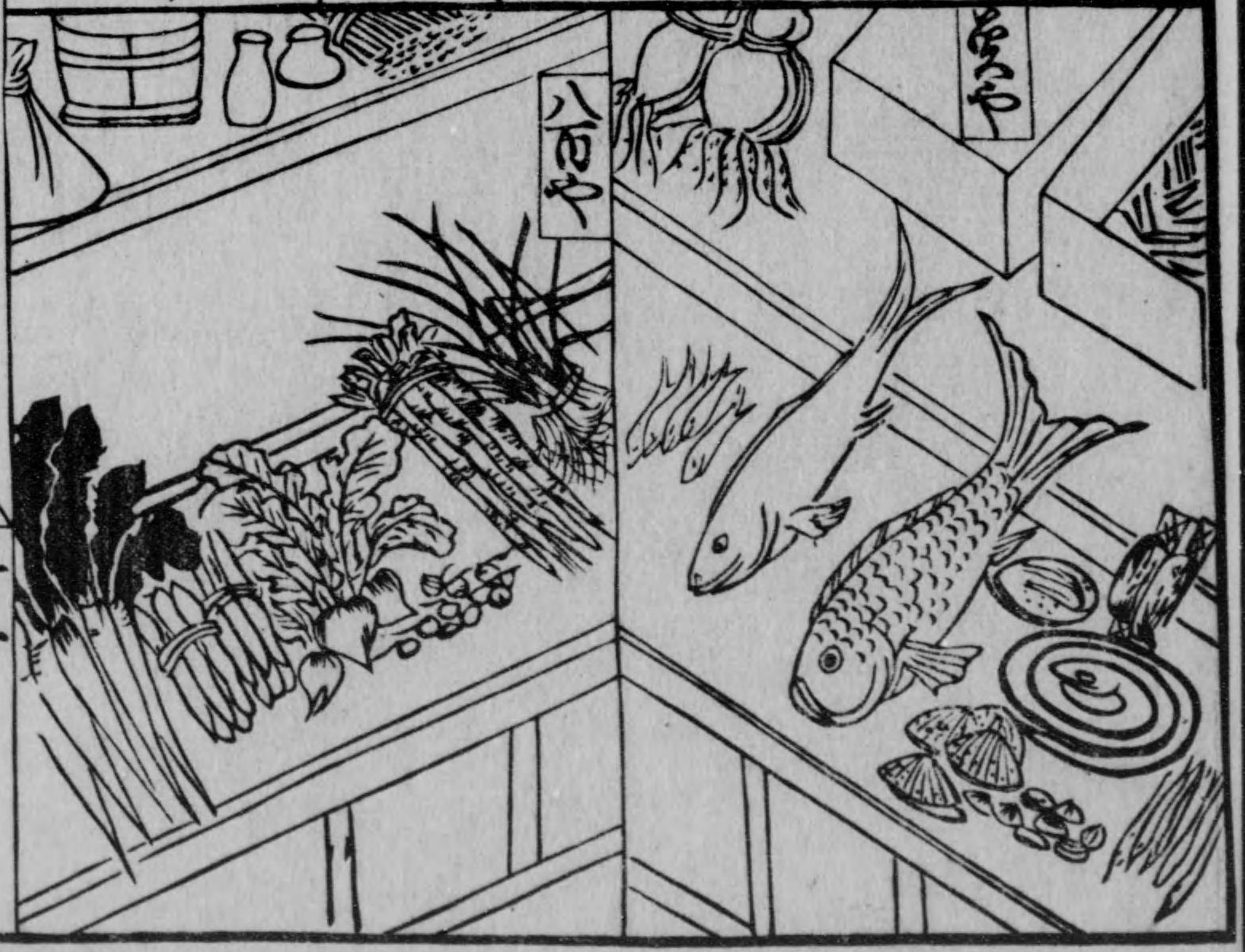
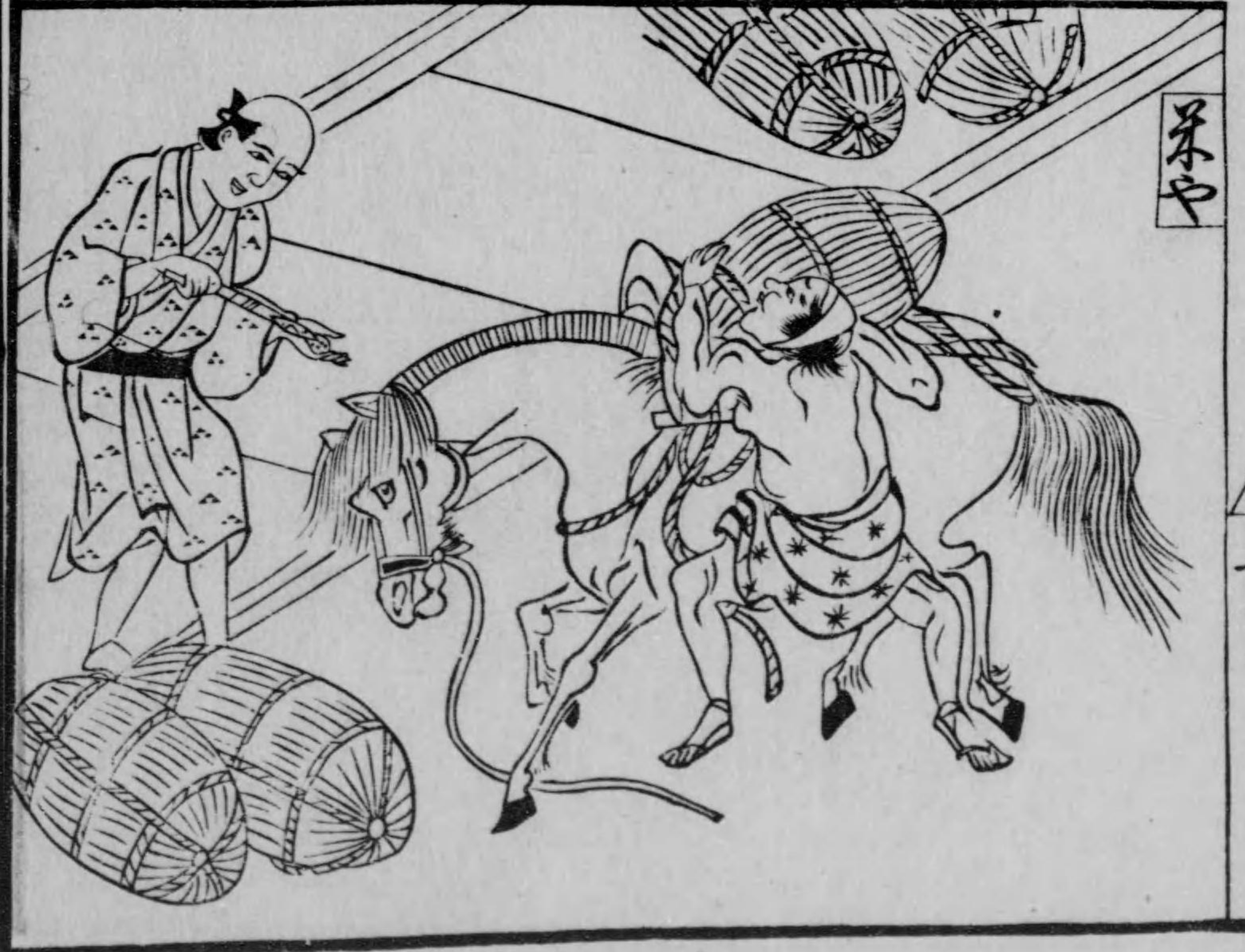
貨物 金圓一つけの

町のあてふくろり金圓一

つけのあてふくろり金圓一

同くあてふくろり金圓一

八景 一切移すの綱金



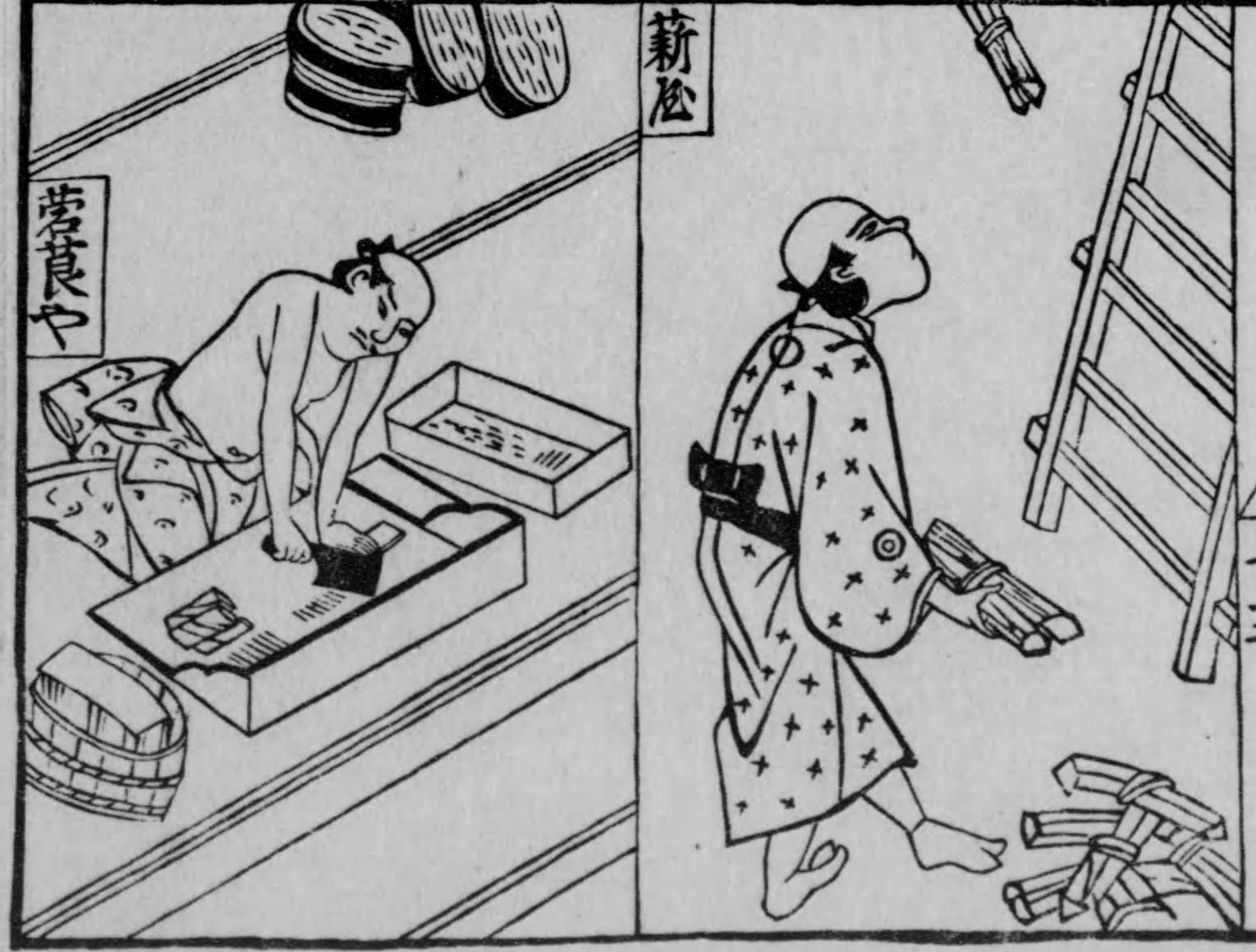
重みありの繕作のねれ者
 間路一切の作細手合
 と来り行の足廻り
 兼湯道具行揃と初め
 大八切木重りのあり
 作皮履 草履 笠 蓑
 の衣いよの菓子と包こ又
 くらしぬおまるといふ
 庭石や 海山の石并るる
 船井符る極の水神也
 京万葉の巻鳥丸れぬ大坂様



堀めあり 下草や 芝
 の一着こそと高木池通
 新町入八町二人あり花
 の本れせあり十めつら
 櫛や 花やと草花に
 丹波未熟のこ圓より花
 抹茶河一重よりあり
 挽茶や 空焙茶と挽茶
 高木こみあり 薪や
 田圃とらりありとらり
 後の新炭と高田炭中



鴻上ル丁より二条中んま
 ちかみ茶七条中んまあり
 御茶あつてとれと茶あつて
 小つけろあつて小よつての茶
 ぬえの中所よりいね園えの
 目利くらふ **若狭屋** 丹波
 右中より新田こまのあつて
 のんがこまといわれとあつて
 割師いしあつてあつてあつて
 津は本屋所よりあつてあつて
 うや約巻やあり庵丁六坊



よりつろつろあつて三文字茶石
 しろの代ゆあり
茶屋 中校今剛並田も
 ぬけあつてとれとあつて
 あつてはくろつてあつてあつて
 ああり
油屋 大坂長りのあつて
 てあつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつて
 と今あつて



麵敷賣 饅飽 蕎麦切と
 一捲切ふらりめ来よ今に
 るひありくそ外麵敷の
 懐食と弓して一捲の代
 みた切よそと何とるふと
 仏心ありとちあはわり
 又狭園町同業賑あよ飯懐
 食やわりの代下
 焼豆腐師 市打町法合の
 場多乳乃所万日千日の
 廻向玉給人のあつまるおに

とせどか田心といふまは
 酒肴し付合かり茶蕨
 餅師敷の焼師給うり石
 焼業うりてふ一巻なり
 口上商人 万の合業并も繋
 付のどろし給分ちは金相場
 あみ出并台よてとれとり
 又い鉢と捲蛇とを縁人形
 と出おまひりて人よあは
 是と何とあ形のは一捲の商
 かり

徳双紙賣

七上

徳双紙賣



十五

焼豆腐師



麵敷賣



十四

石巻本町の極品の茶也
 高野のあり
 大坂の杉堀の海老汁
 のおぼろ下谷本に麻
 布にあり
 蘭麝粉
 けやあひの粉よりうの季
 友人子よこれを用ひ給ふ
 由は粉のほやううう三
 子のてうわい一かまありと
 つーもこのつやあひ
 のとくうやあせ教う
 りらうらり男也も



にうらけやうくおほひ物
 和納豆 為ひしたく回南
 にうらく細菜たうを
 添うは給やましく又葉
 の物九月末二月中ら
 ありあふ海海日際上ん
 町 法福味香 茶豆
 て製まらう町へ賣
 よつら男柳深のり
 びうとと強いさう事
 尾法海味香りの物
 板之曲物よ奇麗な海



こもとおかしく一考あり
 何方よてと下はしむに
 かくもたう一方とさるる
 西のこせおこし人いふこ
 急きせわう一子ある女
 ひかしくいふおれいふ
 くらみぬいふいふ

お納屋



注通儀坊

印行三百部之内
 第 二 號

大正十年二月廿五日印刷
 大正十年二月廿八日發行

第二期
 第八回

編輯者 東京市牛込區宮久町八十四番地
 編輯兼發行者 山 山 清 作
 東京市牛込區御徒町一丁目七番地
 印刷者 阿部 鍋五郎
 東京市牛込區宮久町八十四番地
 發行所 米 山 堂
 電話 三三六九
 郵便 三三六九

15
396

終